

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 26 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20330099

研究課題名(和文) 中山間地域における都市農村交流を媒介とした地域再生方策

研究課題名(英文) The local reproduction policy that assumed city farm village interchange in the intermediate and mountainous area mediation

研究代表者

斎藤 義則 (SAITO, Yoshinori)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70162245

研究分野：都市・地域計画

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：中山間地域、地域再生、都市農村交流、ライフスタイル、地域社会

1. 研究計画の概要

中山間地域の地域資源をライフスタイルに関わるものであるとの認識から、「水・エネルギー(薪)・食料」を一部自給していることに注目し、これを媒介にして都市農村交流会を実施する。その過程で地域再生方策の課題を明らかにし、自給圏の創設による地域再生方策を検討する。

2. 研究の進捗状況

主に茨城県大子町を対象にして調査研究を行っている。

これまで、GISによる集落類型の分析、集落の社会構造の分析、都市農村交流に関するレビューを踏まえつつ、大子町における都市農村交流推進のための課題を検討してきた。その結果、農林業生産面には問題があるものの、諦めを含めて生活面ではほとんど困っていないことがわかった。そのため、都市農村交流による地域再生への取り組み意欲はきわめて弱く、組織を立ち上げるのに大変苦労した。その「黒沢地区都市農村交流を考える会」が立ち上がり、平成22年11月には「やみぞの蔵と山里料理」と題する都市農村交流会を社会実験的に実施し、料理部、体験部、農産物販売部、事務局などの組織化が図られた。また、30人募集のところ60人が応募してきた人気の高さが伺えた。

また区長に都市農村交流の受け入れ意向アンケート調査も実施し、「人間性が良ければ受け入れる」という回答が最も多く、今後都市農村交流を大学などの外部機関や専門家が支援することで推進されることと思われる。

EUと茨城県の農業政策比較においては、既知のことではあるがEUのデカップリンに

基づく多様な補助金、国、州、市町村から交付されており、日本の生産主義的な補助金制度と大きく異なることが明らかになった。

都市農村交流を媒介とする資源については、「一部自給型ライフスタイル」を提案する。ある集落では「水」は山から引き、炊事や風呂焚き、暖房に豊富な「薪」を使い、「野菜」はすべて自給している。このように、「水」と「エネルギー」、「食料」の一部を自給している。都市農村交流も自給型ライフスタイルを提案するというかたちで行えないか検討している。このことが地域の見直しにつながり、地域住民の誇りを高めるものと思われる。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

都市農村交流のレビューをふまえて、GISによる集落類型の分析により集落特性を明らかにし、区長アンケートにより都市農耕流への移行など現状を把握している。地域資源については、当初、衣食住遊の個別の観点から把握しようとしていたが、研究の進展に伴い、それらをまとめた生活総体としてのライフスタイルを地域資源としてとらえることにした。それを「一部自給型ライフスタイル」と呼んでいる。またこのコンセプトに基づき、社会実験的に平成22年11月に「やみぞの蔵と山里料理」という都市農村交流会を実施した。

このように調査はおおむね順調に進展しており、地域再生方策を検討する準備が整った。

4. 今後の研究の推進方策

平成23年度は、これまでの調査を踏まえ

つつ、地域再生方策を検討・提案する。

「一部自給型ライフスタイル」の提案を都市農村交流に継続して実施するにはどうするか。

体験部・宿泊部・レストラン部・農産物加工部などを定着させるにはどうするか。

地域の間伐材、名水などの特産品開発をどうするか。

上記の課題を中心に検討し、最終的に報告書としてまとめる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①斎藤義則「中山間地域におけるライフスタイル提供による都市農村交流の促進について」茨城NPOセンターコモンズ 査読なし
2010年3月31日 66-71頁